

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第2回高松市創造都市推進懇談会（U40／3期）
開催日時	平成29年2月21日（火） 18時30分～20時30分
開催場所	高松市役所13階 大会議室
議 題	（1）市長あいさつ （2）アイデアシートの発表 （3）今後の進め方について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	徳倉会長、大美副会長、坂口副会長、河田委員、桑村委員、児島委員、笹川委員、田中司委員、田中祐委員、谷委員、瑞田委員、西谷委員、眞鍋委員、宮井委員、吉岡委員、若宮委員、渡邊委員
市職員	藤本、小松、時高、住吉、末澤、堤、田村、美濃、本条、永木
事務局	大西市長、佐藤参事、橋本部長、平田補佐、溝渕補佐、塩田係長
傍聴者	4人（定員5人）
担当課および連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

1 開会

2 大西市長からあいさつ

平成24年度から、芸術文化やスポーツなど人間の積極的な付加価値の高い活動をよりよいまちづくりに活かせるかたち、それによって魅力あるまちを作っていこうということで創造都市づくりというものを始めている。クリエイティブな地域づくりをどんどんやることで、経済の活性化や産業の振興に結び付き、まち全体が活性化していくということでやっている。

若干、試行錯誤もあったが、特に芸術文化の面では昨年3回目となる「瀬戸内国際芸術祭」が大盛況で開催され、高松を中心とする瀬戸内地域のブランドイメージがかなり高まっており、内外に知られるようになってきたと感じている。そういう意味でも創造都市づくりという方向が間違っていなかったなという手ごたえを感じている。

もうひとつ脱皮して、大きく進めていけないものかということで、そのあたりのアイデアやご提言をみなさんにいただきたいと思っているところ。

今日は私から3点お話したい。

今年の私の抱負を漢字一文字で表すという機会があり、『繋』という字を選んだ。繋ぐと言っても単に1対1でつなぐのではなく、網や輪のようにつなぐネットワークを大事にしていきたい。1つは人と人とのネットワークであり、

審議経過及び審議結果

地域と人とのネットワークでありということ。もう1つは公共交通充実というもの特に図っていきたいということで、コンパクトプラスネットワークのまちづくりをやっているところですが、そこにも力を入れていきたいと考えている。

創造都市づくりという中で、力を入れたいものとして、3つの指向というものをビジョンの中に掲げている。1つ目は「独創指向」独創的なアイデアを進めていきたいというもの。2つ目は「未来指向」将来に向かって大きく羽ばたいていくというもの。3つ目は「世界指向」。今年は特にこの3つ目の「世界指向」に力を入れたいと思っている。先ほど言った「瀬戸内国際芸術祭」で世界に対して高松をかなりアピールできるようになった。高松空港の直行便が急激に充実してきたこともあり、昨年度のインバウンドの宿泊予約客数の伸び率について、高松・香川地域が全国で1番の伸び率を示した。それだけインバウンドが急激に増えている状況なので、この流れを定着させたい。そして高松を世界に売り込んでいけるよう、「世界指向」に力をいれたい。

ビジョンの中にも掲げているが、中の1つのテーマとして「こども」というテーマを掲げている。クリエイティブチルドレンプロジェクト。こどもたちにクリエイティブな感覚をつないでいくことに力を入れたい。まさに少子化が続いており、こどもの数はどんどん減っていく中で、少子化対策と同時にこどもたちに地域の良さをきちっと味わってもらって、より大きく将来的に発展させる、こういうことにつなげていってもらいたい、こどもに対する働きかけを重視したい。

3 前回欠席者からの自己紹介

【会長】

あっという間に2月も後半となり、前回いろいろ宿題を出ささせていただいたが、90のアイデアをいただきました。今日は大西市長も来られるということで、これから前回欠席していたメンバーから自己紹介をいただいた後、せっかく市長がおいでのお機曾ですので、いくつか私と副会長と事務局でピックアップさせていただいたアイデアを何件かみなさんと共有させていただいた後に、どういうふうに今後進めていくかということを決めて、もう来週になります。次回3月2日と今日の2回で、この90の中から何をやっていくのかどう進めていくのか、それを進めながらどのようにビジョンの改定をしていくのか進めていこうと思う。

前回の欠席者からの自己紹介

4 アイデアシートの発表

今回みなさんから90のアイデアをいただいた。みなさんにも発表は後々していただきますが、まずは事前にピックアップさせていただいたものを、たたき台として発表いただきたいなと思っている。アイデアテーマの一覧で、番号の若い順に発表をお願いしたい。

【発表1】

『「2018年屋島レクザムフィールド日本パラ陸上競技選手権大会開催決定」
選手・大会関係者へのおもてなし、高松魅力 PR 企画・運営／見る・する・支えるから
はじめるスポーツ』

視覚障害として2020年の東京パラリンピックへの出場を目指している。現在の
主な練習場所として、高松市の総合体育館のウエイト場、かがわ総合リハビリテー
ションセンターで練習している。リハビリテーションセンターは槍投げを50m投げた
ら外に出てしまうんじゃないかというような危険な状態で練習している。そんな中、
4月の中旬に屋島レクザムフィールドがオープンする。そこでバンバン投げれるとい
うことで、他の選手よりリードできるのではないかとワクワクしているところ。

日本選手権と呼んでいる日本パラ陸上という大会が、2018年に屋島で開催され
ることが決定した。これは、四国初で、地方開催は昨年鳥取に続いて2回目とな
る。ずっと大阪で開催されていたが、昨年鳥取で開催され、今回高松が地方で2回
目の開催となる。世界ランキングの選考も兼ねており、2019年のアジアパラリン
ピックの選考基準対象の大会でもあり、もしかすると2020年東京パラリンピック
の選考の対象となる大会にもなるかもというとても重要な大会。

選手側の立場ではあるが、高松に選手200人、関係者100人が来た時に、交通の
便、宿泊は大丈夫なのか、単なる300人ではなく、様々な障がいを持った方が200
人来るということは受け入れ体制をしっかりとしておく必要があると思う。

例えばホテルであれば、バリアフリーが整っているかとか、空港～ホテル～競技場
の便を考えたときに、考えなければならない項目が多々あると感じている。

私が実際に県外の大会に行った際には、空港～ホテル～競技場の行き来だけで、そ
の土地の魅力も感じないまま帰ってくる大会がほとんど。せっかく来ていただくの
で、開催地の地元の魅力を是非知ってほしい。土日の試合の翌日に「高松魅力発見ツ
アー」を企画してもいいなと思っている。

私は地域に密着したスポーツイベントや、古民家再生プロジェクトのコーディネー
タをしている。今回日本パラ陸上の件を伺い、一緒にアイデアを考えた。自分自身は
競技者ではないが、スポーツや地域をどれだけ自分事にするかということをして
いる。なので、MICEという名のもとに、イベントや展示会、大会招致をやって
いると思うが、MICEの後、どれだけ来てもらえるかが大事だし、まちの人がど
れだけ自分事にできているかを基準にアイデアを考えた。

スポーツの3つの視点「みる・する・支える」これがスポーツの3軸。

まずは「みる」。パラ陸を見に来てもらうことが必要。興味をもらうことが大事。

次に「する」。これは「みる」の伏線としてイベントを行う。事前イベントの中
で、どれだけ市民の人たちに自分事にしてもらうかを基準に4つ考えた。

- ・屋島フィールドでミックス駅伝

障がいのある方、小学生、中学生、成人のミックスチームを作り、それぞれの障害
物競走をつなぎあわせて対抗駅伝にする。

- ・トークイベント

まちなかでもPRしたい。アスリートを呼んでのトークイベント、パラアスリートや、パラリンピックのマラソン伴走者の方のお話を聞くイベントなど。JRの駅活用の提案があったので、ぜひ駅の中で、トークイベントや棒高跳びの実演ができれば。

・ブラインドサッカー

目の見えない方がフットサルコートで音を頼りにサッカーをするもの。それをまちなかでエキシビジョンとして行う。

・こどもたちに伴走者の体験をしてもらう

これをチャンスにアスリートの方とふれあってもらい、2020東京パラリンピックに出るかもしれない選手と関わりを持つことで、関係性をつくることでパラ陸上を見に来るようにしてもらおう。自分事にしてもらおう。

最後「支える」、これが一番大事。「する」方は限られているが、「支える」方はすごくたくさんある。私のアイデアシートにも入れたが、「ボランティアの育成」について。MICEもそうだが、いろいろなイベントでボランティアを募集する機会がある。集めます、解散します、また集めますの繰り返しになるところを、ネットワーク化して、必要なときに欲しい人たちにボランティア情報を提供できる環境に。

また、定期的に情報を出すなど研修も一緒に進めたい。大会そのものだけでなく、先ほど提案のあったツアーをする場合にも、介助ボランティアは必要になるはず。ボランティアの育成や、接し方、障がい者の方とどう接したらいいのかわかならと思うてる人たちのための勉強会もプログラムに組み込めたら。

あと、バリアフリーのまちなかMAPが必要になると思う。高松の中にどれだけバリアフリーのトイレがあるか。私は防災のことも結構やっていて、「どこでもトイレ」というサイトがあるのだが、情報はほとんどあがっていない。そういう情報は現地にいる人じゃないと発信できない。

最後に、「市民への告知」。これはとても大事。パラ陸上の開催期間中は、街中に車いすの方がすごく増える。そのときに、「なんかいっぱいおったな」で終わるのか、「パラ陸があるからいっぱいいるんだね」と思うのとでは大きな違い。まずはそういう大会があることを市民の人たちに知ってもらい、その中で手伝えることがあれば関わってもらい、参加者にまた来たいと思ってもらえるまちなかにしたい。ここがきちんとできれば、おもてなしの本質にせまれるのではないか。

【会長】

1つ質問。ずっと大阪で開催していたのはインフラが整っているとかサポート体制が充実しているから？

【委員】

地方ではバリアフリー化のホテルなど、受け入れ体制が整っていないということもあり、どこの自治体も手を挙げなかったというのがある。

【会長】

これから6つのテーマを発表していくが、90のテーマを1人ずつやっている朝が来る。進め方についてはすごく悩んでいる。そこについては、今日の後半と懇親会

と来週（次回）でやりたいが、みなさんそれぞれ思いがある中で、どれを実現していくかを考えるときに、前回は何度も言ったが、95%は実現できないということ。5%をどれにしていくか、5%の中で、確度を上げていく。

あとは『創造都市推進ビジョン』の改定という任務があるので、そこに紐付ながら発信する方も聞く方も進めていただければと思う。

【発表2・3】

『事業継承を切り口とした若者と地域の接点の場づくり、プログラムづくり』

『高松若者図鑑』

高松若者図鑑を作るという、ネット上に高松のおもしろい人を集約するというをやったらどうかという提案と、事業承継を切り口としたプログラムを作ったらどうかという2点。

私は若者会議という団体で、主に20～30代の東京や四国に住む若者を相手に、若い人が集まる場を作っているが、すごく感じているのは、地域に戻りたいか戻りたくないかと言えば、圧倒的に地元に戻りたくないという人が多い。理由は東京での仕事の方がおもしろいと感じているから。だから普通に帰ってきてよと話をしても無理だなと思う。一方で、帰ってきたいという人が増えているという実感もある。3.11が起きてから、田舎暮らしを見つめ直したというのもあるし、四国に対する感度が上がっていて、どういう人が帰ってきているかと考えると、私自身は若い人と接している中で、価値観の多様化をすごく感じる。いままでみたいに単純に、田舎がいいよ、地方がいいよという言葉では伝わりにくい。

四国若者会議では、そうした若い人たちの地域への関与を5段階に分けて考えている。

1 全く関心なし / 2 認知人口（地域を知っている） / 3 訪問人口（来たことがある。交流人口） / 4 関係人口（地域に対して一定程度の関係を持っている） / 5 定住人口

四国若者会議では、「関係人口を増やす」ということを命題においてやっている。それをどの深さでやるかということで、深さの違いで「若者図鑑」と「事業承継」を説明できると思っている。

『若者図鑑』のイメージは、20～30代の人が見て、こういう生き方はモデルケースとしてすごくおもしろいと思う人、サラリーマンでも企業家でもお坊さんでもなんでもいい。それを、1つのホームページに集約して見れるようにしたい。生き方をたくさん伝えることで、香川県、高松の総合力がこんなにあるんだとか、こんな暮らしができるんだみたいな、働き方だけでなく生き方を伝えられると思っている。1つの事例だけでなく、数と深さに厚みが必要だと考えているので、数を集めて、その人が香川のどこにいてどこでどんな働きをしている人がいて、自分に関心の近い人がどんな人なのかをわかるようなページを作りたい。

実際すでに友人を集めて作成しているので、それに添わしてもいいし、なかなか合わないようなら別ページで作ってもよい。

『若者図鑑』については、「四国若者会議」でやろうとしていることがあって、関

係人口を増やして繋いでいくためにはいろいろな人に会うことが大事だと思っている。人間関係をつくる場づくりをしているが、その若者凶鑑で一元に集めた人たちが、例えば行政や企業の研修で活用されれば。場づくりの提案から人づくりまで総合的にやれる、総合コンシェルジュのような、プラットフォームを作ったら意味があるんじゃないかと思っている。

もう一つの『事業継承』については、関係人口をもっと深くして行って、定住人口のギリギリ手前で考えることは、働く場。移住したいけど仕事がないという声が多い。地域でもものすごく困っているという現状と、首都圏の人でおもしろく働けるといところを掛け算すると、地域のものすごく困っている、新しいこととしてチャレンジできる内容として、事業承継はおもしろいんじゃないかと考えた。この先、残す残さないのためにドラスティックにももの考えることも可能になる。そういうふうな熱意があるなら関わろうかと思う若い人はいると思う。

いきなり事業承継するのは難しいと思うので、まずはプログラムを作って、プラットフォームを作って、認知がある人を集めてプログラムを提供して、時期が来たらマッチングにつなげるイメージ

この2つをやることで、高松に関与する人口は確実に増えると思う。

【発表4】

『高松クラフトウィーク開催』

これは市の予算をがっちり見越してできることは何かと考えたときに、私自身、伝統的ものづくりの審議会委員も務めているが、そこで予算を得られなかったことに対して、どうやったら実現できるか、クラフトに対して人口をどうやったら増やしていけるか、先ほどの事業承継の問題もクラフトに関して言えば相当深刻なので、そこらへんに楽しさを加味しながら考えた提案。

創造都市推進局全体で取り組むことができるという前提のもとで、クラフトと言っても、伝統工芸から木工や金属工芸、もっといけば農産業にも食い込んでいく話なので、高松市の既存の美術館、歴史資料館、図書館、教育分野の活動、ミライエなども含めて、展示というかたちをとることができるかなど。売買前提ではなく、伝統工芸や、県内の木製品などいろいろなものを展示する。

民間の側としては、展示だけではお金が儲からないので、各店舗と作り手が共同で商品開発を行う。それを店舗の側のジャッジで販売する。そういったことをゆるやかにつなげていくことができないか。

産地、例えば庵治石の大丁場の見学や、漆芸家の工房など、産地の見学ツアーというのを、すでに私の店でもやっているが、そういったことも市と連携して、これは観光業に食い込んでくると思うが、そういったことがクラフトを介してできるかなと思っている。

あと、クラフト製品と農林水産、食をつなげるということ。モノはモノだけでは売れない時代。そこに付随する付加価値として必要な手立て。ありがちな案だが、飲食店で漆器を使って食事をする、しかもその食事の材料はすべて高松産みたいなことを行って行けば。

実はそのあたりのことを加味すると、すべて創造都市推進局内でまかなえるのではと思っているので、そこにスポーツをつなげてもいいし、そういったウィークにギユ

ッとまとめて、大人から子どもまで楽しんで高松の魅力をクラフトという切り口でわかってもらえるのではと思っている。

【発表5】

『高松ミライエを核とした、市内施設等の企画展・体験教室の連携』

先ほどの大西市長からのあいさつにもあったが、創造都市高松で最もユニークな点が『こども』という視点の取組みをクローズアップしているところ。

創造都市で目指す先の1つである「シビックプライドの醸成」というところは、高松に住む子どもたちに私たちが何を伝えたいかとかどんな体験をしてもらいたいかという発想で、事業に取り組んでいくことがとても大事だと思っている。

今回のみなさんのアイデアシートの中にも、『こども』に着目したアイデアがたくさんあり、自分も子どもと一緒に参加したいと思うものがたくさんあった。

現ビジョンの『こども』分野は「芸術士派遣事業」がメインになっているが、昨年11月にたかまつミライエがオープンした。創造都市というと文化・芸術のイメージが強いが、創造都市高松といえば『こども』の取組みだよねと言われるくらい、クリエイティブな子どもを育てるところにスポットを当てて、創造都市の施策を進めていきたいという思いがあり、市を挙げて「こどもの創造性を育てる」ことに力を入れているという機運を高めたいという思いがあり、この提案を書いた。

アイデアシートに書いたのは、その機運を高める1つの案。0才からのコンサートなど、いろんな子どもイベントがミライエで開催されるようになるなど、子育て拠点施設として中心的な役割を担いつつあると思うが、他にもある市の施設、例えば美術館や歴史資料館やスポーツ施設などと一緒に企画してできるともっと広がるだろうなと考えている。

後半部分に「夏休み親子探検隊」というチラシのことを書いた。ここ数年夏休みに市役所の各課が行っている親子教室やイベントをリーフレットにまとめて市内のすべての小学生に配布するという事業をやっていた。3年間産業振興課で作っていたが、ミライエが出来て、夏休みにミライエでもイベントをやるだろうということで、そこにくっつけて情報発信できたら楽しんじゃないかと思ってミライエでの予算化をお願いしていたが、今回全予算を削られてしまい、同じやり方での広報は難しくなった。

ここでのアイデアで、子どもというところの機運を高めるところと、それを市民の方に知ってもらおうということについて、みなさんと考えられたらおもしろいんじゃないかと思って提案した。

【会長】

このチラシがなくなるのは今日一番のショック。うちでも活用していたので。

【発表6】

『さぬき食の学校（仮）Food School of Sanuki』

このメンバーで何ができるかを最初に考えた。私自身は、四国食べる通信という四国中の食材と物語を届けるという仕事をやってきたので、「食」と「風景」を軸に考えたいと思った。先ほど、こどもの話があったが、自分自身に子どもはいないが、身近にこどもの問題を考えるような環境で過ごしてきたこともあり、こどもがどういふふう元気、また経済的な問題では、文化的なものを享受できない子どもたちがい

っぱいいるなというのを西日本にきて特に感じる。

食をテーマにすると、3期のメンバーでいうと、例えば工芸品なら、漆とか器関係のことは食に関わってくるし、いただきさんの提案も。

昨年 EAT BEAT というイベントで、食べる通信のメンバーが中心となって、食と音楽のイベントを開催した。

食の学校という、学校をモチーフにして、廃校とかでもいいが、いろんなテーマを設定しながら、クラフトと郷土料理と色々なものをこどもたちと学べる場所にできたらなと思い提案した。

実は4つ目の提案があり、私自身がなぜ移住してきたかと改めて考え直すと、もともと四国経済産業局というところの仕事があったから移住できた。仕事があるかないかということが移住者にとってすごく重要。四経局にいた4年間の間に「しこくびと」という WEB サイトの運用で、いろんな経営者に会っていろんな人に取材する中で、東京の友人とかからすると、高松って仕事ないんでしょ、すごく楽しそうに移住したいけど仕事ないから大変だよねという一方で、四国中で出会う経営者は人材がないと口をそろえて言う。そこのマッチングができていない。ずっと四国にきてから4年間同じ問題を抱えているなという思いがある。

日本仕事百科という WEB サイトで結構な人が移住してきたりだとか動きがあるが、仕事百科はどうしても東京の媒体なので、地元の人たちで、もっと地に足をついた形で経営者と寄り添いながら経営者の想いを発信するような媒体がなんで立ち上がらないんだろうという思いがあった。

3期メンバーには、WEB 制作会社のメンバーや、東京にいろんなネットワークがあるメンバーもいるので、こういったものの仕事に関わるポータルサイトが高松市できたらいいんじゃないかと思っている。

【会長】

こんな感じで今7つのアイデアを発表してもらったが、これで1時間かかった。これが90あるので大変。

そこで、一覧表を見ていただきますと、「関係課が創造都市推進局の課のみの場合に○」となっている。はっきりいいます。1つは「予算の問題」。あと、やるときに誰が中心となるのか「人的リソース」とか「限られた時間」。例えばパラの案だと、期限が決まっている。来年度何かしようとする、すでに予算化は終わっている、今ある事業に U40 のアイデアやエッセンスを入れてもらって実現するという作戦。関係課が創造都市推進局の中で終わるということは、調整しながら、U40 の意見も入れて予算化に向けて進めていくことがやりやすいかなと思っている。

来年度はいまある事業や課の中で完結する事業の中で、何か1つでも実績を残していきたいというのが1つ。もう1つは、再来年度予算をとって新しい事業をやっていく。そのために、どういうスケジュールでものごとを進めて、企画を練り上げていかないといけないかそういう観点で、行政の予算の仕組みについて事務局から説明をお願いしたい。

【事務局】

<予算の仕組みについて>

1 次予算（経常的経費）：10月末要求締切

2 次予算（政策的経費）：11月末要求締切

【ゼロから新規で事業を始める場合】…原則としてまちづくり戦略計画に採択されることが必要。8月中旬までに事業計画書を提出（7月中旬までに粗々の企画書つくることが必要）

↓

内容を市民政策局で調整

↓

11月上旬に採択・不採択の結果が出る

↓

2次予算として11月末までに予算要求

↓

財政局が内容を査定し、翌年1月下旬に予算内示

↓

3月下旬に議会で議決

【すでにやっている事業を少し拡大する場合】

上記のような段取りは不要で、1次予算として要求し、認められれば実施できる。

【ゼロコストの事業】

予算の手順は必要なしで、関係する部署の意思決定のみでできる。

まずは原則どおり、まちづくり戦略計画の重点取組事業にあげていくことを目指していくことが一般的と考えられる。

【会長】

ビジョンの改定と合わせて、夏までは、再来年度に活動するためのベースを固めていくという作業と、コストがかからないような事業は早めに議論して進めていく。こんなふうに分けをしながら、来年度できるもの、再来年度に向けて予算を要求していくものに分けていきたい。

なぜこの話を2回目にやったかということ、本気で何かやりたいと思っているから。ビジョンの改定だけでなく、すぐできることと、準備して翌年度に活かすことと両方やっていく必要がある。わりとこの半年くらいが勝負。ここをみなさんと共有したかった。

今後の進め方について、みなさんと相談したいのだが、来年度すぐできそうなものかつ、近しい部局でできるものを選びながらその中で拾っていくという作業が必要なのと、新規事業で企画書を作ると言っても45作るのは難しい。その中で確度が高そうなたぶん2～3本をどう作るのかを調整する、そんな2回にしたい。

【副会長】

まず感じているのは、みなさんのアイデアの精度高さにびっくり返りそう。いまの話聞いて、今すぐできるもの、来年度できそうなもの、再来年度に向けてエンジンかけていくものという3つに分けて考えることが、最初の段階かなと思う。見ている

と、これとこれと一緒にやると更におもしろいんじゃないのみたいながあるので、そういう組み合わせも考えながら3つのカテゴリーに分けていければと思った。

【会長】

91あるので、会長・副会長で3人いるから、順番に30ずつに分けてさっきの振り分け、「来年度に向けてお金がかかりそうにないもの」「来年度、お金はかかりそうだけど他の事業に乗っかってやれそうなもの」「再来年度に向けて予算要求していくもの」という3つのグループにわけていいか？限られた45分のうち30分を、この並びで分けるので、グループワークをやっていただきたい。

- ・すぐできるもの（ゼロコスト）
- ・来年度（ちょっとお金かかるけど担当部局と調整したらできるかなというもの）
- ・再来年度の予算化を目指すもの

農業のことをやるとなると、専門家の方が何人かいらっしゃってメインになると思うが、それ以外の専門分野の人はモチベーションが下がるかもしれない。今はみんなモチベーションが高い状態だと思うけど。これから事業を絞っていくにあたっては、専門性を生かすものと、多くの人に関われるもの、両方できるとうれしいなと会長として思っている。

（グループワーク）

【会長】

ポイントは個の厚さではなくて、みんなでコンセンサスを見ながら何ができるかということ。ビジョンの改定の作業に添わせながらやっていくということなので、それを意識しながら、なにがしか結果を残していくということ。今日と次回1セットというイメージなので、事務局には、今日のグループワークのまとめを次回の当日までにまとめておいてほしい。

【市長】

みなさんありがとうございます。徳倉会長も素晴らしいファシリテーターで、ほんとにありがとうございます。みなさまからいろんなアイデアがあり、90のアイデアそれぞれ素晴らしいものだし、いろんな想いも感じた。ただ現実に行政が取り上げるには、行政のルールもあるのでそれに乗せていかないといけないところもある。さきほど説明したのは、大きな政策的枠組み事業の話なので、通常の簡単なものや予算を必要としないような事業については民と官で協力してできることがあるだろうし、あるいは年度途中であってもどうしても必要ならば補正という方法もある。次回またこれが段々絞られてきて実現に向けていくことを楽しみにしている。

来年度はビジョン改定の年ということで、みなさまに積み上げていただいたものがビジョンとして成果物の1つになるのではと思っている。今日はありがとうございました。

（委員からイベント等の周知）